

平成24年度 第2回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
西海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(平成25年4月～9月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域の位置は6月には「離岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、全般的には「平年並み～やや高め」で経過するが、薩南沿岸と沖縄島周辺海域の前半は「やや低め～平年並み」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「やや」 : 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」 : 約2年に1回程度の出現確率

漁況(来遊水準)

- (1) マアジは前年並み。
- (2) マサバは前年並み。
- (3) ゴマサバは前年並み。
- (4) マイワシは前年並み。
- (5) ウルメイワシは前年並み。
- (6) カタクチイワシは前年並み。

※「前年」は平成24年4月～9月。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当：沿岸資源班 新村、中津

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

(予報の詳細についてのお問い合わせ先)

独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所 業務推進部

担当：與世田、岡

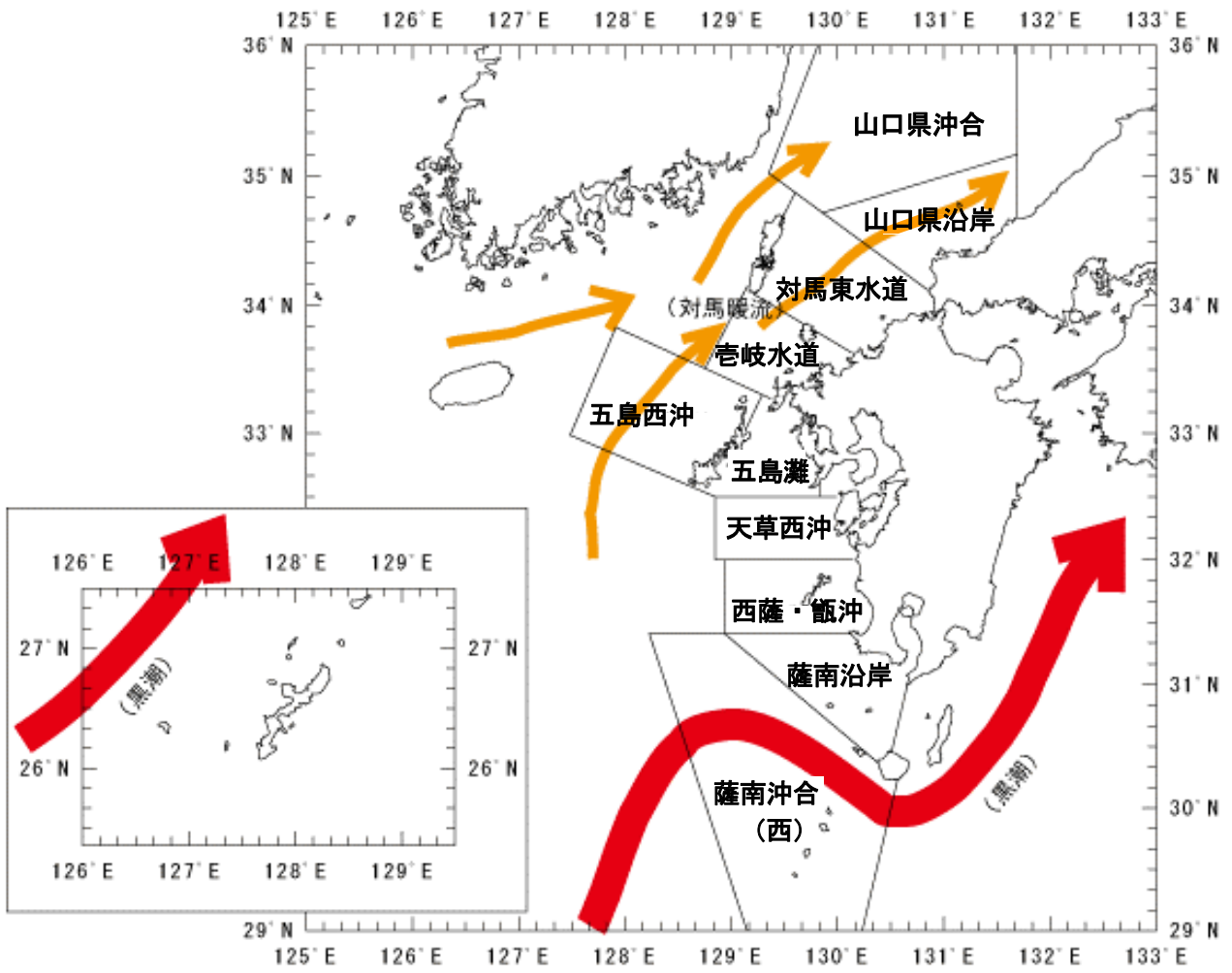
電話：095-860-1600、ファックス：095-850-7767

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://snf.fra.affrc.go.jp/>

予報対象海域



西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2013年4月～9月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域の位置は6月には「離岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、大陸棚上、黒潮域で「平年並み～やや高め」、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甑沖で「平年並み」、薩南沿岸で「やや低め～平年並み」、沖縄島周辺海域で、前半は「やや低め～平年並み」、後半は「平年並み」で経過する。

2. 経過（2012年10月～2013年3月）

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：10・11月「平年並み」、12月～2月「やや低め」。

南部：10月～2月「平年並み」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、10月は「接岸傾向」、他の月は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」で経過。

(2) 海面水温

10月「やや低め」、11月～1月「平年並み」、2月「かなり高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：10月「平年並み」、11月「やや低め」、12月「はなはだ低め」、1月「平年並み」、2月「かなり低め」、3月「平年並み」。

山口県沿岸：10・11月「平年並み」、12月「はなはだ低め」、1月～3月「平年並み」。

対馬東水道：10・11月「平年並み」、12月「はなはだ低め」、1月「平年並み」、2月「やや低め」、3月「平年並み」。

壱岐水道：11月「はなはだ低め」、2月「やや低め」、3月「平年並み」。

五島西沖：11月「かなり高め」、2月「平年並み」。

五島灘：11・2月「平年並み」。

天草西沖：11月「平年並み」、1・3月「やや低め」。

西薩・甑沖：11月「平年並み」、1・3月「やや低め」。

薩南沿岸：11月「かなり低め」、1・3月「平年並み」。

薩南沖合：11・1月「やや低め」、3月「平年並み」。

沖縄島南東：10月「はなはだ低め」、11月「やや低め」、3月「平年並み」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：10月「平年並み」、11月「やや低め」、12月「平年並み」、1月「やや低め」、2月「はなはだ低め」、3月「かなり低め」。

山口県沿岸：10月～12月「平年並み」、1・2月「やや低め」、3月「はなはだ低め」。

対馬東水道：10月～12月「平年並み」、1・2月「はなはだ低め」、3月「かなり低め」。

壱岐水道：11月「平年並み」、2・3月「やや低め」。

五島西沖：11月「平年並み」、2月「はなはだ低め」。

五島灘：11・2月「平年並み」。

天草西沖：11月「やや低め」、1・3月「かなり低め」。

西薩・甑沖：11月「やや低め」、1・3月「かなり低め」。

薩南沿岸：11・1月「やや低め」、3月「平年並み」。

薩南沖合 : 11月「平年並み」、1・3月「やや低め」。
沖縄島南東 : 10・11月「やや高め」、3月「やや低め」。

3. 現況 (2013年3月上旬)

(1) 大陸棚上

海面水温は北部、南部ともに「平年並み」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「接岸傾向」。海面水温は「やや高め」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「平年並み」。

(注) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の出現確率

「かなり」 : 約7年に1回程度の出現確率

「やや」 : 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」 : 約2年に1回程度の出現確率

東シナ海～日本海西南域マアジ・さば類・いわし類長期漁況予報

今後の見通し（2013年4月～9月）

対象海域 : 東シナ海～日本海西南海域

対象漁業 : まき網、定置網、その他

対象魚群 : 0歳魚（2013年級群（2013年生まれ））、1歳魚（2012年級群）、2歳魚（2011年級群）。
魚の大きさは、マアジ・さば類は尾叉長、いわし類は被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1) 来遊量 : 前年並み。

(2) 漁期・漁場 : 沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年並みで平年を下回る。

(3) 魚体 : 15～25cmの1歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が主に、5～15cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と25cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. マサバ

(1) 来遊量 : 前年並み。

(2) 漁期・漁場 : 沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年を下回る。

(3) 魚体 : 27～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）が主に、15～25cmの0歳魚（豆銘柄）も漁獲される。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量 : 前年並み。

(2) 漁期・漁場 : 沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年並みで平年を下回る。

(3) 魚体 : 沖合域では28～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）が主に、15～28cmの0歳魚（豆銘柄）も漁獲される。沿岸域では33～38cmの3・4歳魚（中銘柄）が主に漁獲される。

4. マイワシ

(1) 来遊量 : 前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場 : 長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体 : 漁期前半は19～23cmの2歳魚以上（大羽銘柄）が、漁期後半は15cm以下の0歳魚（小・中羽銘柄）が主に漁獲される。

5. ウルメイワシ

(1) 来遊量 : 前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場 : 漁期後半を主体に、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体 : 漁期前半は18cm以上の1・2歳魚（大羽銘柄）が、漁期後半は5～15cmの0歳魚（小・中羽銘柄）が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1) 来遊量 : 前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場 : 主に5月～8月に沿岸域に漁場ができる。

(3) 魚体 : 4月は10cm以上の1・2歳魚（大羽銘柄）に3～6cmの0歳魚（カエリ・小羽銘柄）が混じり、5月以降は5～10cmの0・1歳魚（カエリ～大羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2012年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。
沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2012年10月～2013年1月）および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980・1990年代前半に増加し、1993～1998年には近年では高い水準を維持した。1998～2000年の加入量減少のため、資源は減少傾向を示したが、2001～2004年の加入量は1994～1997年と同程度の高い水準で経過し、2004年にかけて資源量は増加した。2005～2007年の加入量水準は近年では低い水準となり、2008年にかけて資源量は減少したが、2008年以降には加入量は増加したとみられ、資源量も増加した。

東シナ海・日本海（青森県～鹿児島県）での我が国のマアジ漁獲量は、1973～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2002年は13万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し2004年には19万トンであったが、2006年以降は減少して13万トン前後で推移し、2011年は13万8千トンであった。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970・1980年代は比較的安定していたが、1992～1996年に増加傾向を示した後、1997年に急減した。1998～2000年にかけてさらに減少し、2000～2007年は低い水準で横ばい傾向を示していた。2008年の高い加入量のため、資源量は2008年に増加したが、2009年以降は横ばい傾向を示している。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半には27万～30万トンであったが、その後減少し、1990～1992年は13万～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降、漁獲量は増加傾向を示し、1996年には41万トンに達したが、1997年は21万トンに大きく減少した。その後もさらに減少し、2000～2006年は9万トン前後で推移していた。2007年は10万6千トン、2008年は12万1千トン、2009年は13万1千トンと、2007～2009年にかけて緩やかな増加傾向を示したが、その後は2010年に11万8千トン、2011年に11万1千トンと緩やかに減少している。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992～2011年に比較的安定して同程度の水準で推移している。近年では2004年級群の高い加入量のため、資源量は2005年に高い値を示した。その後、資源量は2008年にかけて減少傾向を示したが、2009年以降は緩やかな増加傾向を示している。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1980年代以降およそ5万トン前後で推移している。1999年に近年で最高の8万8千トンが漁獲された後、減少傾向を示し、2004年は3万1千トンであった。2005年には7万6千トンに増加したが、その後は再び減少傾向を示し、2010年は3万トンとかなり低い値を示した。2011年は2010年より増加し4万9千トンであった。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、その後1980年代にかけて高い水準にあったが、1990年代に急激に減少し、2001～2003年には過去最低水準となった。2004年以降は増加傾向にある。近年では、2010年級群の高い加入量のため、資源量は2010年に増加した。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983年から1991年までは100万トン以上と多かったが、その後、急激に減少した。2001～2003年に漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年以降は漁獲量が増加傾向にあり、2010年には6千トン、2011年には4万4千トンであった。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するウルメイワシの資源量は、1970年代後半と1980年代後半に多く、1980年代前半および1990年代後半から2000年代前半には少なかった。近年では、2003年以降、増加する傾向にある。

東シナ海・日本海での我が国のウルメイワシの漁獲量は、1981年から1989年にかけて徐々に増加し、1989～1993年は4万トン前後で推移したものの、その後減少した。2000年に1万3千トンとなった後は増加に転じ、2010年の漁獲量は2万9千トン、2011年の漁獲量は3万7千トンであった。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1970年代から1980年代後半までは低く、1980年代後半から増加し始めた。1998～2000年の資源量水準は推定されている期間の中で高位であった。しかしながら資源量は2004年まで一旦減少した後、2007年にかけて増加したものの、2008・2009年に減少し、2010年と2011年は2009年と同水準であった。

東シナ海・日本海での我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1982年に7万3千トンとなった後、1990年まで減少した。その後、漁獲量は徐々に増加し、1998～2000年には12万トン以上となった。2001・2002年は漁獲量が一旦減少したものの、その後は再び増加し、2008年には9万7千トンとなった。2009年は5万1千トンと減少したが、2010年は6万6千トン、2011年は6万5千トンであった。

2. 漁況の経過

2012年10月～2013年1月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖および五島西沖が中心であった。この間の大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計5万9千トンで前年(2011年10月～2012年1月、6万4千トン)を下回った。マアジは6千トンで前年(1万4千トン)を下回り、さば類は4万6千トンで前年(3万9千トン)並みであった。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は鹿児島県を除いて前年・平年を下回り、全体としても前年・平年を下回った。漁獲の主体は17～25cmの1歳魚と17cm以下の0歳魚であった。マサバは、海域によって差があるが、概ね前年・平年を下回った。漁獲の主体は25～32cmの0・1歳魚であった。ゴマサバは、前年・平年を下回った。漁獲の主体は31～38cmの2・3歳魚であった。マイワシは、前年を下回り、平年並みであった。漁獲の主体は18cm以下の0・1歳魚で、19～22cmの2歳魚以上も漁獲された。ウルメイワシは、前年・平年を上回った。漁獲の主体は13～20cmの0・1歳魚であった。カタクチイワシは、前年並みで平年を下回った。漁獲の主体は4～12cmの0・1歳魚であった。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

例年、4月～9月期には1歳魚(ゼンゴ・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。2011年級群は2010年級群を上回る豊度と考えられ、2012年級群は2011年級群を下回る豊度と考えられる。2013年級群の豊度を予測するのは困難であるが、東シナ海における着底稚魚の分布量(0歳魚の資源量指標値の一つとなっている)と4月半ばの好適水温帯面積は高い相関が見られ、2013年(予測値)は2012年を下回っていることから、前年(の0歳魚、以下同様)を下回ると考えられ、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE(1日1隻当り漁獲量)は、2006・2007年は低い水準だったが、2008～2011年は増加し、2012年は減少した。4月～9月期には沖合域で操業する大中型まき網漁業の主漁場は、東シナ海と対馬沖となる。沖合域の漁況は、前年に行われた調査船調査結果から、東シナ海では1歳魚(2012年級

群)は前年を上回り、2歳魚(2011年級群)は前年並み、対馬沖では漁獲の主体となる1歳魚が前年並みと考えられ、全体としては前年並みと考えられる。一方、沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量は、2011年に減少し、2012年も近年では低い水準となった。沿岸域の漁況は、直近までの漁獲状況から判断して、低調だった前年並みで、平年を下回ると考えられる。

(2) マサバ

例年、4月～9月期はマサバの盛漁期にあたらないため、漁獲は低調に推移するが、1歳魚(豆・小銘柄)が漁獲の主体で、7月以降には0歳魚(豆銘柄の一部)も漁獲の主体となる。2011年級群の豊度は2010年級群より低く、2012年級群の豊度は2011年級群より高いと考えられる。2013年級群の豊度を予測するのは困難であるが、親魚量の水準は横ばい傾向で、初期生残の良否に関わる環境要因の指標と見られる水温(東シナ海南部、2月)が、2013年は2012年よりやや高いので(水温が高いと初期生残に不利)、2012年級群より低いと見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚(2013年級群)は前年を下回り、1歳魚(2012年級群)は前年を上回り、2歳魚(2011年級群)は前年を下回ると見積もられる。来遊群の主体は0・1歳魚となり、0歳魚が前年を下回るものの、1歳魚が前年を上回ることから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

沖合域の漁況は、来遊量が前年並みであることを反映して前年並みと考えられる。沿岸域の漁況は、直近までの漁獲状況から判断して、前年・平年を下回ると考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、4月～9月期には1歳魚(豆・小銘柄)が漁獲の主体で、7月以降には0歳魚(豆銘柄の一部)も漁獲の主体となる。2011年級群の豊度は2010年級群より高く、2012年級群の豊度は2011年級と同程度と考えられる。2013年級群の豊度を予測するのは困難であるが、親魚量の水準は横ばい傾向なので、2012年級群と同程度と見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚(2013年級群)は前年並み、1歳魚(2012年級群)は前年並み、2歳魚(2011年級群)は前年を上回ると見積もられる。来遊群の主体となる0・1歳魚がともに前年並みであることから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

沖合域の漁況は、来遊量が前年並みであることを反映して前年並みと考えられる。沿岸域の漁況は、直近までの漁獲状況から判断して、前年並みで、平年を下回ると考えられる。

(4) マイワシ

例年、4月～9月期の前半は1歳魚以上(大羽銘柄)が、後半(夏以降)は0歳魚(小・中羽銘柄)が主に漁獲される。これまでの漁況の経過より、2010年級群は近年では最大の豊度であり、今期も漁獲の主体と考えられる。2011年級群の豊度は2012年級群と同程度で、2010年級群を下回ると考えられる。2013年級群の豊度を予測するのは困難であるが、2012年級群と同程度と見積もると、0歳魚(2013年級)は前年と同程度、1歳魚(2012年級)も前年と同程度であり、全体の来遊量は前年・平年並みと考えられる。

(5) ウルメイワシ

例年、4月～9月期の前半は1・2歳魚(大羽銘柄)が、後半に0歳魚(小・中羽銘柄)が主に漁獲される。これまでの漁獲状況等から、2011年級群の豊度は2010年級群と同程度が高く、2012年級群の豊度は2011年級群よりも高いと考えられる。2013年級群の豊度を予測するのは困難であるが、2011・2012年級に引き続き高い水準となると考えられる。これらのことから、全体の来遊量は近年では好調だった前年並みで、平年を上回ると考えられる。

(6) カタクチイワシ

例年、4月～9月期には4月に1・2歳魚(大羽銘柄)が、5月以降に0歳魚(カエリ・小羽銘柄)主体に1歳魚(大

羽銘柄) 混じりで漁獲される。2012年級群の春季発生群の豊度は2011年級群の春季発生群の豊度を下回ると考えられる。2012年級群の秋季発生群の豊度は2011年級群の秋季発生群の豊度並みと考えられる。2013年級群の春季発生群の豊度を予測するのは困難であるが、2012年級群の豊度と同程度と見積もると、全体の来遊量は前年並みで平年を下回ると考えられる。

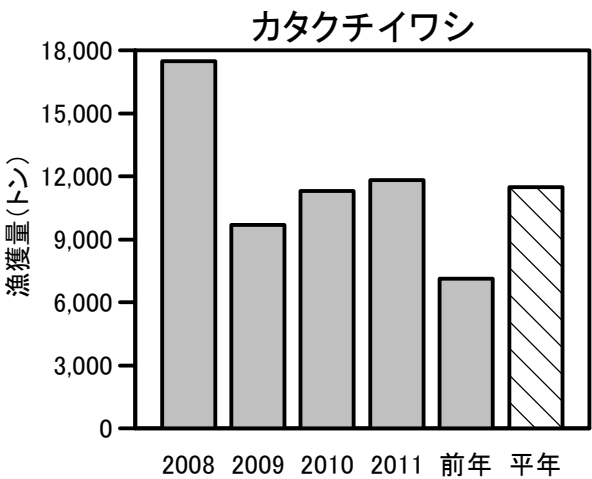
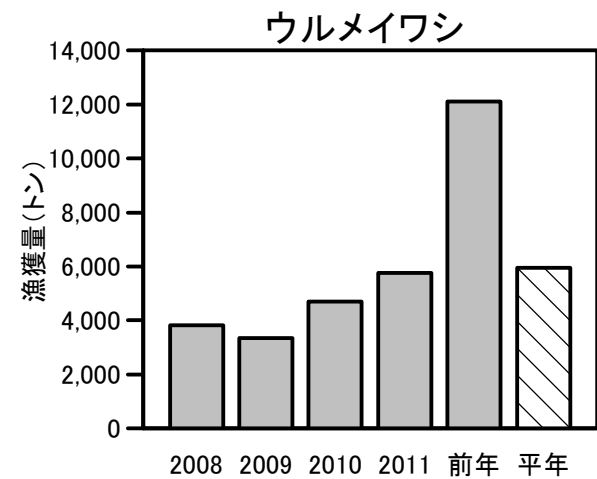
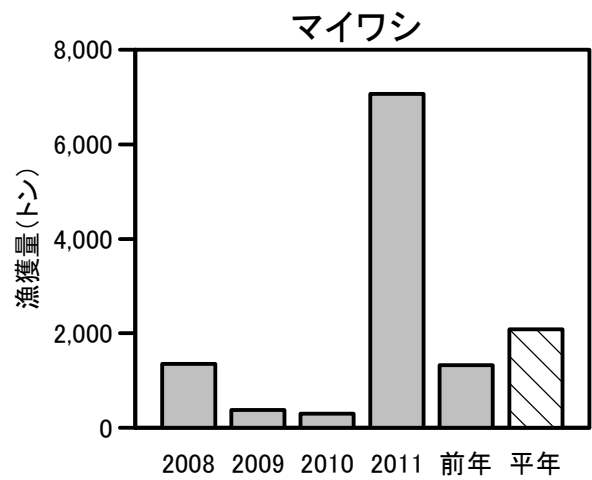
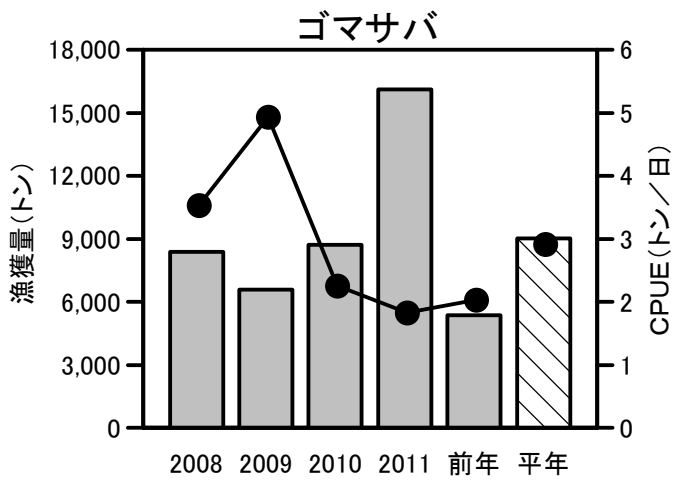
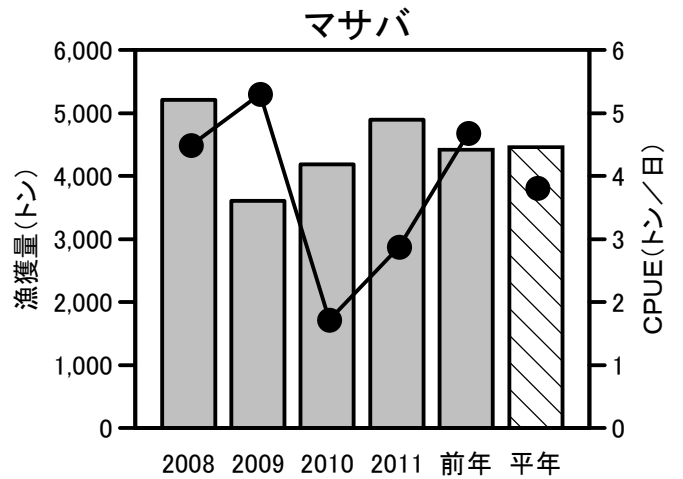
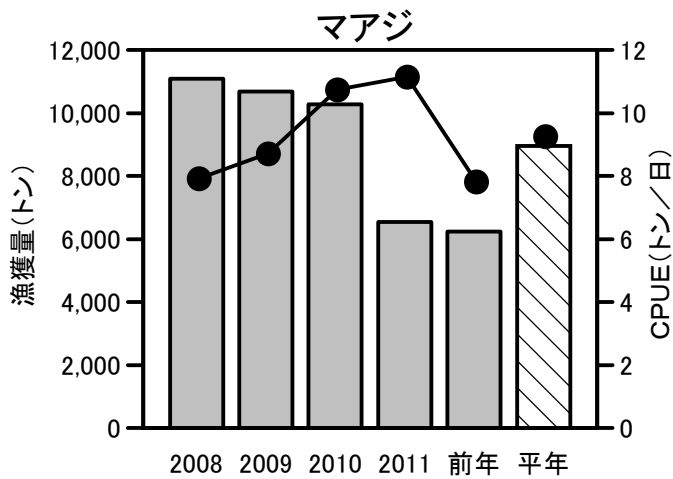
表1. 沿岸域の漁況経過 (2012年11月～2013年1月、一部2012年9・10月を含む)

| | マアジ | マサバ | ゴマサバ |
|-----------|--|--|--|
| 山口 | 中型まき網で158トンの水揚げがあり、前年・平年を下回った(前年比25%、平年比31%)。棒受網では、水揚げされなかった。 | 中型まき網で137トンの水揚げがあり、前年を上回り、平年を下回った(前年比150%、平年比51%)。棒受網、すくい網では水揚げされなかった。 | |
| 福岡 | 代表港中型まき網の水揚量は14トンで前年・平年を下回った(前年比6%、平年比6%)。漁獲のうち97%がマメ銘柄で、その水揚量は前年・平年を下回った(前年比10%、平年比18%)。棒受網の水揚量は2トンで前年・平年を下回った(前年比12%、平年比9%)。小型定置網の水揚量は9トンで、前年・平年並みであった(前年比85%、平年比94%)。 | 代表港中型まき網の水揚量は33トンで前年・平年を下回った(前年比7%、平年比10%)。ギリ銘柄が水揚げのほとんどを占めた。棒受網の水揚げはなかった。 | 代表港中型まき網の水揚量は138トンで、前年を下回り、平年を上回った(前年比58%、平年比280%)。 |
| 佐賀 | 前年・平年同期を下回った(前年比34%、平年比38%)。 | 前年を上回り、平年同期を下回った(前年比277%、平年比59%)。 | |
| 長崎 | 地域により差があるが、概ね前年・平年を下回った(前年比42%、平年比73%)。 | 地域により差があるが、概ね前年・平年を下回った(前年比51%、平年比53%)。 | |
| 熊本 牛深港 | 水揚量は22トンで、前年・平年を下回った(前年比21%、平年比25%)。 | 水揚量は 344 トンで前年並みで、平年を上回った(前年比96%、平年比 124%)。 | |
| 鹿児島 | 県4港のまき網では、アジ仔(2012年級群)主体の漁獲となった。期間中合計で469トンの水揚げで、前年並みで、平年を下回った(前年比89%、平年比74%)。 | | 県4港のまき網では、期間中薩南海域が主漁場となり、ゴマサバ中(2009年級群)主体であった。期間中合計で2382トンの水揚げで、前年・平年を下回った(前年比47%、平年比63%)。 |

表1. 続き

| | マイワシ | ウルメイワシ | カタクチイワシ |
|-----------|--|---|---|
| 山口 | 棒受網・すくい網でヒラゴ(0歳魚)が0.8トン水揚げされた。 | 中型まき網、棒受網、すくい網では水揚げされなかった。 | 棒受網、すくい網で85トンの水揚げがあり、前年・平年を下回った(前年比56%、平年比51%)。 |
| 福岡 | 代表港中型まき網の水揚量は0.1トンで前年・平年を下回った(前年比6%、平年比12%)。棒受網の水揚量は0.1トンで、前年・平年を下回った(前年比53%、平年比1%)。 | 代表港中型まき網の水揚量は6トンで前年・平年を下回った(前年比14%、平年比45%)。棒受網の水揚量は0.1トンで前年を上回り、平年を下回った(前年比1120%、平年比32%)。 | 代表港中型まき網では水揚げがなかった。棒受網の水揚量は17トンで前年・平年を下回った(前年比50%、平年比58%)。 |
| 佐賀 | 11月にわずかな水揚げがあった。 | 11月にわずかな水揚げがあった。 | 前年・平年同期を上回った(前年比131%、平年比162%)。 |
| 長崎 | 前年・平年を上回った(前年比138%、平年比126%)。 | 地域により差があるが、前年を下回り、平年並みであった(前年比63%、平年比86%)。 | 地域により差があるが、前年・平年を下回った(前年比58%、平年比50%)。 |
| 熊本 牛深港 | 水揚量は16トンで、前年・平年を下回った(前年比5%、平年比21%)。 | 水揚量は505トンで、前年・平年並みであった(前年比102%、平年比102%)。 | 水揚量は91トンで、前年・平年を下回った(前年比48%、平年比48%)。 |
| 鹿児島 | 県4港のまき網では、ウルメイワシに混じって甑島周辺や野間池沖で漁獲された。期間中合計で203トンの水揚げで、前年を下回り、平年を上回った(前年比70%、平年比151%)。北薩海域の棒受網でもウルメイワシ混じりで26トンの水揚げがあり、前年を下回り、平年を上回った(前年比44%、平年比207%)。 | 県4港のまき網では、北薩海域では13~17cm主体、薩南海域では14~18cm主体に漁獲された。期間中合計で1995トンの水揚げで、前年・平年を上回った(前年203%、平年162%)。北薩海域の棒受網では166トンの水揚げで、前年・平年を上回った(前年比265%、平年比328%)。 | 県4港のまき網では73トンの水揚げで、前年・平年を上回った(前年比403%、平年比148%)。北薩海域の棒受網では88トンの水揚げで、前年・平年を上回った(前年比316%、平年比393%)。 |

注：「前年」は2011年11月～2012年1月、「平年」は過去5年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量(沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ)と大中型まき網の1日当たりの漁獲量(沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE)。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県(ゴマサバを含むが主にマサバ)、ゴマサバは鹿児島県(マサバを含むが主にゴマサバ)、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。4月～9月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

| | |
|----------------|-------------------------------|
| 山口県水産研究センター | 沖縄県水産海洋研究センター |
| 福岡県水産海洋技術センター | 社団法人 漁業情報サービスセンター |
| 佐賀県玄海水産振興センター | 水産庁 増殖推進部 漁場資源課 |
| 長崎県総合水産試験場 | (取りまとめ機関) |
| 熊本県水産研究センター | 独立行政法人 水産総合研究センター 西海区水産研究所 |
| 鹿児島県水産技術開発センター | |